

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 21 日現在

機関番号：33901

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23652016

研究課題名(和文) 受容者の立場の違いに起因する中国美術の多面性と豊穰性に関する研究

研究課題名(英文) Study of many aspects and fertility of the Chinese art discovered by the diverse viewpoints of the appreciation

研究代表者

木島 史雄 (KISHIMA, Fumio)

愛知大学・現代中国学部・准教授

研究者番号：50243093

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円、(間接経費) 810,000円

研究成果の概要(和文)：西欧における東洋美術の収集と鑑賞は骨董趣味としてはじまり、後に「美術史的」研究となったが、「書画」に冷淡であることが本研究によって明らかとなった。これは西洋的手法では東洋書画の魅力を十分に受容できなかったことを意味する。その弱点は、「主題の文学依存」、「書と画の一体的・総合的表現」、「鑑賞言説(題跋)の重要性」といった文字文献とのつながりへの理解不足にある。とりわけ鑑賞者が作品に与える文章(題跋)が、造形作品自体と一体となって次の新しい鑑賞対象となるという枠組みは、西洋的鑑賞法には無いもので、発展性にすぐれ、最先端の受容理論と有機的に関わって芸術行為の新たな展開と豊饒化の鍵となりうる。

研究成果の概要(英文)：Collection and the appreciation of the Eastern art in Europe began as antiquarianism, and it became a study of "the history of art" later, but it is indifferent to "painting and calligraphy". This means that the Western way of appreciation is impotent in enjoying them. This is brought about by the lack of understanding of the three kinds of relation of literature to the art, "literature as subject", "the integral expression of literature and image", importance of later comments and discourses(DAIBATSU) to the art works. After accomplishment of art works, appreciators often make comments on them. After this stage new art works and new critical comments are often made for the integrated whole of the visual and literal works. This is a characteristic ways of art activity in the East, never seen in the West. This Eastern way of appreciation answers the purpose of modern art theory.

研究分野：哲学

科研費の分科・細目：芸術思想

キーワード：東洋美術 欧米コレクション

中国美術認識の地域的・時間的偏差の研究

欧米における中国美術研究史の分析を通して、西洋的・日本的・中国的偏差を探る

1. 研究開始当初の背景

欧州における東洋美術の研究と収集は、かつては好事家による道楽として行われるのが一般的であった。それが次第に学術的もしくは政策的に展開してきた。その事実は認識されているが、その背景にある美術史的関心、国際政治情勢、諸他の芸術における東方趣味の流行、前衛的芸術運動・理論等との関係が明確になっていない。しかし西洋における東洋美術の受容は、東洋での受容に対して単純に遅れていると言うのみではない。確かに東洋現地での需要に比して劣る面もあるが、起源を異にする受容ならでは、東洋的受容法に盲従するだけでは見出し得ない東洋美術の諸特性を明らかにする可能性を秘めている。このような関心が持たれるようになってはいたが、欧州における受容の有様は具体的に確認されて居らず、また考察方法も未発達であり、研究成果も十分に公開されてはいなかった。

2. 研究の目的

「研究開始当初の背景」にしるしたように、西洋における東洋美術受容の研究は、東洋美術の諸特性を明らかにする可能性を秘めている。しかしその研究手法、研究素材、考察理論などは十分に議論・整理されていない。それどころかこういった研究手法の実践に対して、伝統的美術史の手法からはみ出るものとしてその価値が適正に評価されていない恨みがある。本研究の目的の一つは、上に述べた西洋的な東洋美術受容法を認識し記述することである。第2の目的は、西洋的な東洋美術受容法と東洋の伝統的な受容法の違いを明らかにすることである。第3の目的は、西洋的な東洋美術受容法が生まれた背景を明らかにし、加えて西洋的な東洋美術受容法ならではの長所・短所を確認することである。第4の目的は、西洋的な東洋美術受容法の考察を通して、亜西洋的あるいは近代的な芸術受容法しか知らない現代日本人に最もふさわしい東洋美術受容法、すなわち「前近代中国美術の持つ美へのアプローチ法」提案することである。

3. 研究の方法

(1)本研究には三人の研究者が所属している。そこで「研究の目的」を達成するために、各人が既に持つ情報と関心に基づいて欧州各地で研究調査を行った。つぎにその成果をメンバーに還元し、関心と情報を共有し、そして最後に自らの関心に基づく研究成果を独自に論文の形で公表しつつ、総合的に「中国美術

認識の地域的・時間的偏差の研究」を行った。(2)具体的な方法は、大きく3つに分かれる。1つは現時点の欧州所在美術館の東洋美術作品収蔵調査である。2つ目は、過去に欧州で刊行された東洋美術概説書の分析である。3つ目は、現地にのみ存在する資料を探索・調査し、東洋美術受容の有様を歴史的・社会的に考察する作業である。そして最後に総合的な検討を行った。

4. 研究成果

研究成果を三つのカテゴリーで記述する。

(1)「ドイツ近代における中国美術の理解と役割」:

研究目的は以下の通りである。ドイツ近代(1900年以降)の東洋美術の動向をみると、日本美術のブームからはじまり、その後、次第に中国美術のブームへと移行する。その背景には、ドイツの政治的な背景が無関係でない。ドイツにとって、アジアで重要な相手として常に中国が考えられていたからである。したがってドイツ近代において重視される中国美術をとりあげるには、政治的な側面にも眼をむけつつ、ドイツではどのように理解され、それはまたどのような役割を担ったのかを考える必要が生じた。これが今回の研究の目的となった。

研究方法は以下の通りである。ドイツにおけるアジア関連の研究機関での中国美術の理解を、現地の公文書をもちいて研究機関の存在を明らかにしたうえで検証する方法と、特にドイツにおいて象徴的な意味を持ったと思われる1935年開催のロンドンの中国国際芸術展でのドイツの評価を取り上げて考察する方法で、本研究をすすめた。

研究成果は以下の通りである。ドイツの第二の都市ミュンヘンは、長らくアジアに関心の強い都市のひとつだが、20世紀初頭に、アジア美術研究のための研究機関が立ち上がる。その動向についてはこれまで全く知られていなかったのも、まずはその機関の全容を明らかにした。それは、南ドイツの東洋美術研究者以外にも西洋美術関係者も会員として、定期的に研究会を催し、中近東から東アジアまで広くアジア全域を考察の対象としながら、美術的なテーマと文化的なテーマをめぐって紹介する研究機関であった。またベルリンの東亜美術協会とも連動していた。東亜美術協会はベルリンを中心とし、その活動範囲はヨーロッパおよびアメリカまでの広がりを持つ。ここでも定期的な研究会を行い、さらには展覧会などを主催したり、関連研究書物を発行

するなど幅広い活動を見せる。ここでのアジアは中国と日本を中心に取り上げるものであった。この東亜美術協会とミュンヘン・アジア美術および文化愛好家協会を総合してみるならば、ドイツにおける東洋美術の重要な研究機関において、東洋美術では中国が主とした存在で、日本美術は副として見なされて中国と日本の美術を軸に研究されていることがわかった。

1935年の中国国際芸術展については、すでに英国での中国美術研究で調べられているが、その展覧会がドイツにとってどのような理解だったのかについては、まだ詳しく知られていない。そのため、その全体を再構成し、そのうえで、関連資料として当時の新聞資料を入手し、それらを分析することで、1935年の展覧会が、ドイツの日本美術展のための牽引力になり、それはまた政治的な関係においても大きな契機となったことが明らかとなった。

- (2) 「20世紀のフランスとイギリスにおける中国古美術受容」：20世紀のフランスとイギリスにおける中国古美術受容、とくに書画について調査・研究した。欧米における書画愛好は、陶磁器や銅器よりずっと後れ、1920～30年代になるまで顕在化しないが、その背景には、真正の古画が1920年代まで明らかでなかったこと、欧米における伝統的な絵画の概念と書画との間に齟齬があること、絵画史の編纂が1930年代までなされず、真贋に大きな問題があったこと、など複数の障害があったことが挙げられる。骨董は西洋における装飾芸術の範囲で理解可能であり、すぐに蒐集・研究の対象となったが、書画は絵画とは相容れない部分を多く含み、理解には多大な困難と障害があった。仏英における書画の研究はまず1910年代に画論の研究から開始されるが、ここには日本の専門雑誌『國華』国際版とその主筆・瀧精一の影響が如実にみられる。日本的な中国書画観がまずは英仏で受け入れられたことも、考慮せねばならない。1920年代になると独自の中国書画観が英仏の美術評論家によって披露され始めるが、そこには絵画のモダニズムやフォルマリズムの思想が反映されており、中国や日本の理解とは大きく隔たった見方が独自に育ってゆくことになる(ベレンソン、R・フライのケース)。極端な場合、文字の意味や書体、書法を無視した様式分類や分析に傾くこともあった。1935年にロンドンと香港で開催された中国古美術大展覧会は、英中間の書画観の隔たりを如実に示すものとなっている。

- (3) 「東洋的書画觀賞手法と欧州における書画受容手法」:

研究行為概括：今回、補助金を得てイタリア、ポルトガル、スペイン、フィンランド、ハンガリー、オーストリア、チェコの東洋美術を収蔵する美術館・博物館を訪ね、所蔵品の調査を行った。その結果以下のことが明らかになった。

東洋美術を系統的かつ計画的に収集している機関は今回の訪問国には無い。(今回は訪問しなかったが、英国の大英博物館、フランスのギメ美術館、ベルリンの東洋美術館、ケルン東洋美術間等は、計画的系統的収集を目指していると考えられる)

東洋美術の収集品は、外交官・海軍士官・上級船員・富裕旅行者らが現地で偶発的に、もしくは個人的な嗜好にもとづいて購入したものがほとんどである。

収集ジャンルとしては、陶磁器を中心として、仏像彫刻、石刻、青銅器などがこれに次ぎ、絵画はわずかであり、書法作品は極めてまれである。唯一豊富な書法作品コレクションは、香港在住の中国人医師が、信仰上のつながりからスペイン・バリャドリッドの宣教団体所属の東洋美術館に寄贈されたもののみであった。欧州に於いて東洋書作品に関する研究は少ないが、わずかな例外として存在するものはいずれも「篆書」を扱ったものである。幾つかある書体の中で篆書にのみ関心が向けられるのは特徴的である。また東洋美術を収集する美術館でも基本的な漢文文字文献を読みこなし題跋などを読みこなしうる学芸員はまれであり、したがって一般観衆への解説も十分にはなされていない。この調査結果を基に所期の考察を行った。

今回の調査で、欧州で収集された東洋製作の具象性を有する絵画作品は、無彩色のもので比較的広汎に受け入れられているが、書作品は、東洋美術書にほとんど掲載されず、収蔵もされていないことが明らかになった。それは無彩色絵画が受け入れられていることからすれば、造形的無理解に依るのではなく、作品自体の文字としての要素および、作品を取り巻く文字文献とのつながりへの理解不足によるものであると考えられる。

ドイツに始まった美術史研究は、美術作品を造形的側面からのみ考察することの重要性和有効性を先ず説き、その後図像学などの他分野との交渉にも力点を置く考察手法が展開されてきた。しかしそれらは西洋美術の分析手法として考案・展開されたものであり、必ずしも東洋の芸術作品考察に則したものでは無かった。文化的背景を異に

する作品が他地域で十分に理解されることが難しいのは当然である。美術史という手法は、造形性のみを取り出すことで文化的背景による造形性分析の鈍化を嫌い、それによって勝ち得た成果も大きかった。しかし、伝統的美術史の分析手法は必ずしも東洋美術の受容方法として有効なものではなかった。

欧州での東洋美術受容を考察することによって、東洋美術は造形性の分析だけではその魅力を十分に理解できない性格を持つことが明らかになった。東洋美術の十分な受容に必要なものが造形性だけでないとなればそこに欠けたものは何か。それは、書の受容が極端に低いことから、文字文献との協働の要素であろうと推測される。

また欧州における東洋美術理解は、作品のみを考察対象としており、題跋などの作品を取り巻く文字文献への考察がほとんど無いと言ってよい。造形性を考察の中心とする美術史的視点からすれば、題跋など後世の鑑賞者の加えた周辺文字情報は、現在の鑑賞者が作品に向き合う際に必須のものであるとは意識されていない。現に欧州における東洋美術展示は、周辺文字情報をほとんど解説しない。

ここに見える欧州の東洋美術受容の方式は、現代日本においてもほとんど実は同じである。現代日本人は漢字を読むことは出来るが、漢文で記され蓄積されてきた東洋の文字文献教養をもはや持っていない。現代日本人も題跋など後世の鑑賞者の鑑賞行為をも含めた造形物鑑賞の手法を失っている。しかしながら近時、欧州ではデリダらによって美術作品鑑賞における周辺物の重要性が強く提唱され始めている。カント以来「パレルゴン」として排斥すべきものであった周辺情報が、再評価され始めている。このような非造形的要素を重視して造形作品を鑑賞するという鑑賞法は、東洋的な鑑賞法に近づくものである。ただしデリダを以てしても、パレルゴンは、作品理解に不可欠な要素として指摘されるのみであり、東洋芸術におけるように、後世の鑑賞者が題跋などを通して作品とともに鑑賞世界、鑑賞の場、鑑賞対象そのものを作り上げてゆくという所までは思考が及んでいない。わずかに文学における批評理論がそれに接近しているのみである。これは、東洋芸術の芸術論的あるいは受容理論的に先進性を持つことを示している。

近現代の日本人は、東洋の美について、前近代的素養を失い、かつ異文化として真摯に探求する西洋的な意欲も持ち得ないで居る。このような環境の中で東洋の美に着実・切実に迫る方法は、改めて過去の東洋

美術観賞手法を検証することであり、その結果上記のような文字文献とのつながりを理解する素養の必要性が明らかになった。古典的東洋と近現代欧州の間の東洋美術受容の偏差を分析するという本研究によって、東洋で前近代には暗黙裏に共有されていた鑑賞のノウハウが明確に示された。この鑑賞者の立場を重視する考えによれば、作品の評価は、鑑賞の蓄積によって決定される。したがって東洋美術に関して今後、鑑賞を蓄積することにより、それぞれの時代と場所にふさわしい鑑賞世界・鑑賞の場が形成される。中・近世日本における中国美術鑑賞の場はこのようにして形成されたものであり、決して制作の場である中国の鑑賞に劣るものではない。すなわち、世界の人々にとって、これから新たな鑑賞の場を組み上げてゆけば、それぞれの場にふさわしい作品が選ばれ評価されてゆくことになる。日本的あるいは西洋的の偏差を持ちながら、正当な東洋美術理解が成立しうる。制作者よりも鑑賞者を重視し、制作の地よりも鑑賞の地を重視するこのような考えは、その汎用性の高さとお効性故に今後重視されてゆくであろう。これは東洋の芸術鑑賞法の先進性を物語ることと言ってもよい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計7件)

藤原貞朗、偽物と写しの価値転換、茨城大学人文コミュニケーション学科論集、査読無、17号、2014年、ページ未定

安松みゆき、転機としての1935年ロンドン『中国芸術国際展覧会』; 1939年の『伯林日本古美術展覧会』の開催経緯をめぐって、別府大学紀要、査読無、55号、2014年、pp.1-9

木島史雄、美は孤ならず 鑑賞者は「伏生授經圖」をいかに楽しんだか、文学論叢、査読無、149号、2014年、pp.1-35

藤原貞朗、大戦間期の日仏会館の東洋学者とフランス極東学院、日仏文化、査読無、83号、2014年、pp.121-127

木島史雄、初唐におけるモジュール的思考について、中国思想史研究、査読無、34号、2013年、pp.208-229

安松みゆき、ミュンヘン・アジア美術および文化愛好家協会」の活動をめぐる一考察; ドイツ近代における日本美術および中国美術への関心、別府大学紀要、53号、2013年、pp.33-41

藤原貞朗、展覧会評 シャルロット・ベリアンと日本、ジャポニスム研究、査読無、32号、2013年、pp.49-55

〔学会発表〕(計5件)

木島史雄、赤壁は何を以て実在するか、六朝学術学会(招待講演)、2013年12月7日、愛知大学

藤原貞朗、大戦間期の日仏会館の東洋学者とフランス極東学院、日仏会館創設に関する新資料の紹介、日仏会館創立90周年記念国際シンポジウム、2013年10月5、6日、日仏会館

木島史雄、Sugeriuus と歐陽詢、日仏東洋学会(招待講演)、2013年3月31日、鳥取大学

藤原貞朗「天心の子供たち～瀧精一と濱田耕作」(国際日本文化研究センター共同研究会「人文諸科学の科学史的研究」)2012年11月4日、国際日本文化研究センター

藤原貞朗、アンリ・フォションとポストジャポニズムの美学、ジャポニズム学会、2011年7月9日、お茶の水女子大学

〔図書〕(計 1 件)

藤原貞朗、ミネルヴァ書房、東洋意識、夢想と現実のあいだ、2013年、582

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木島史雄(KISHIMA, Fumio)
愛知大学准教授
研究者番号：50243093

(2) 研究分担者

安松みゆき(YASUMATSU, Miyuki)
別府大学教授
研究者番号：40331095

藤原貞朗(FUJIHARA, Sadao)
茨城大学教授
研究者番号：50324728